高齢化の進む長崎市近郊ニュータウン住民の意識調査

長崎大学工学部　学生員○松永　兼吾　　長崎大学大学院　正会員　後藤恵之輔
長崎大学大学院　学生員　渡邊　浩平　　長崎大学大学院　学生員　上戸　英明

1. はじめに

昭和30年頃、日本では高度経済成長が始まって、都市部への大規模な人口流入が生じ、都市部での住宅不足が深刻な問題となった。そのため、都市部で働く人々に質が高く、大量の住宅を供給する必要が生じてニュータウンは建設された。しかし、ニュータウンも最初に計画されてから 40 年もの歳月が流れた。この間に都市部への人口流入の勢いも収まり、新しい生活パターンが生じてきた。建設当初は働き盛りの人々を対象に理想的な街づくりを行ったはずであるが、現在では、住民のライフスタイルの変化、住民の高齢化などに伴い様々な問題が生じてきている[1)]。

本研究においては、長崎市近郊のニュータウンのおかれている現状を調査し、その抱えている問題を把握して理想的なニュータウンを建設していくための糧としていくことを目的とする。

2. アンケート調査の概要

平成 12 年 11 月にダイヤランド地区、同年 12 月に女の都地区の 30 歳以上の住人を対象にして留置き方式でアンケート調査を行った。質問項目は、ニュータウン内での交通に関して、防災に関して、自治会についてなど多岐にわたっている。配布数、回収数および回収率は表-1 のとおりである。

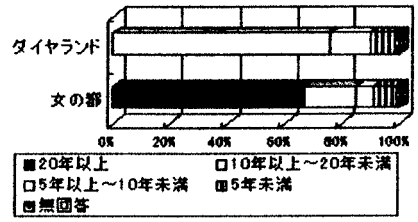
表 - 1　地区別配布数、回収数および回収率

地区	配布数	回収数	回収率
ダイヤランド	300	117	39.0%
女の都	300	100	33.3%
合計	600	217	36.2%

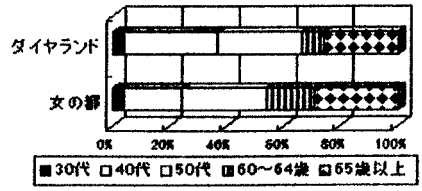
3. アンケート調査の分析結果と考察

(1) 個人属性について

「現在の住居に何年ぐらい住んでいますか」という問に対して、女の都では「20年以上」との回答が60%を超えており、ダイヤランド地区では「10 年以上～20 年未満」の回答が 75%を超えている。女の都地区の住人の入居が始まったのが 27 年前、ダイヤランド地区では 16 年前であり、最も回答者が多かった項目と入居時期とが一致しているのが分かる。これはニュータウンの特徴でもある造成時の住民の一斉の入居というのを顕著に表していると言える。また、「あなたの年齢はいくつですか」という問に対しては、どちらの地区でも「50 代」と回答された方が約 30%と多い割合を示している。これは宅地供給時に生活も安定した 30 代半ばから 40 代くらいの世代の方が一斉に入居し、時が経った現在では 50 代に達していると考えられる。どちらの地区においても50歳以上の回答数が50歳未満の回答数を大きく上回っており、20～30年先には住人のほとんどが高齢者になりうる。



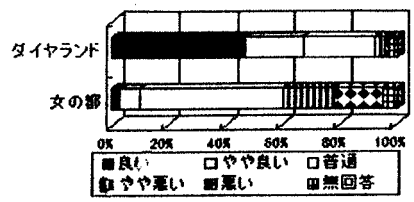
図－1　住人の居住年数



図－2　住人の年齢層

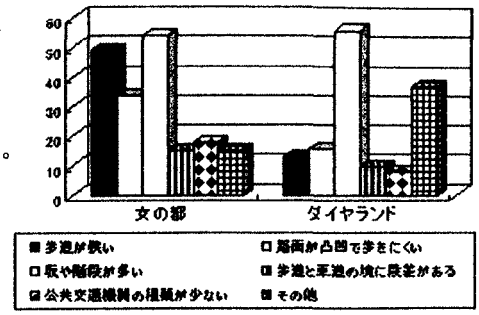
(2) 交通に関して

「地区内の公共交通機関の整備についてどう思うか」という問に対して、「良い」、「やや良い」とする回答はダイヤランド地区で 67.5%、女の都では 10.0%と大きく差が開いている。両地区とも斜面地に造成され、地区内を通る公共交通機関はバスのみしか存在していない。女の都の公共交通機関に対する不満として多く挙がっ



図－3　公共交通機関の整備について

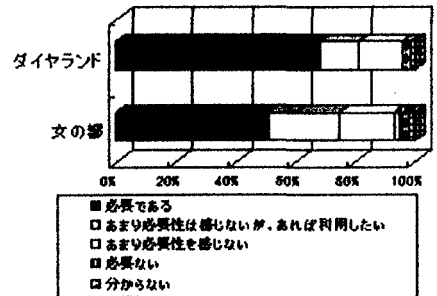
たのが、「バスの便数が少ない」、「女の都入口までの便ばかりで高部まで上がってくるバスが少ない」という意見であった。ダイヤランド地区ではバスの通行網が地区中に張り巡らされており、住人は満足しているようである。女の都地区でもバスの通行網を可能な限り広げれば、住人の不満も少なくなるのではないだろうか。次に「交通に対して感じている不満は何か」という問に対しては、図-4 のような結果が得られた。両地区とも山を切り開いた斜面地に造成されたニュータウンであるため、「坂や階段が多い」という意見が最も多かった。女の都地区では「歩道が狭い」という意見も多く見られた。実際、女の都地区は道路が狭い上、歩道にはガードレールが設置されていない。また、道路の両脇には溝があり、自動車が通る際とても危険である。両脇の溝に蓋を設置し、ガードレールを取り付ければ歩道が広く確保でき、歩行者も安全に通行できるようになると考える。



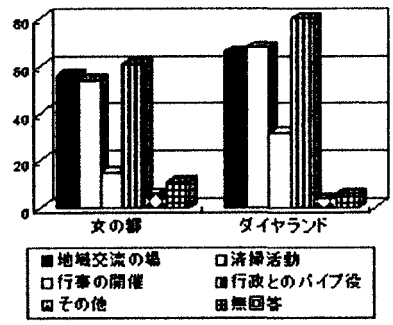
図－4 交通に対して感じている不満

(3) 自治会について

「自治会の会合にはよく参加しているか」という問に対して、「毎回参加している」、「ときどき参加している」との回答はダイヤランド地区で 54.7%、女の都地区で 48.0%であった。両地区とも自治会の役員は輪番制を取っており、班長・役員以外の人は年 1 回の総会に出席すればよいことになっており、また「あまり参加していない」、「参加していない」との回答の中にも「役員ではないので」というコメントが多く、このことから両地区の住民の自治会の参加率は高いものとなっている。「自治会の活動は必要だと思うか」という問に対しての否定的な回答が、ダイヤランド地区では 27.3%であるのに対し、女の都地区では 45.0%であった。ダイヤランド地区の自治会が行政との話し合いを多く持っており、住民の意見が反映されやすいのに比べて、女の都地区ではあまり行政との話し合いをもっていないことによって両地区の差が生じたものと考える。次に、「自治会に何を望んでいるか」と聞いてみたところ、両地区とも「行政とのパイプ役」との回答が多かった。やはり住人は行政に対する様々な不満をもっており、その意見伝達を自治会に求めていることが覗える。



図－5 自治会の必要性について



図－6 自治会に望むこと

4. おわりに

今回のアンケート調査によって露出した問題点は、住人と行政、企業との話し合いで解決できるものが多くあった。女の都地区でもダイヤランド地区のように行政や企業との話し合いを持っていけば、住人の不満は解消されていくと考えられる。これから先さらに高齢化が進んでいくに伴って、歩行困難になった時の対処法や近隣の医療・福祉の施設についてなどといったもっと違った問題が生じることが十分に予想できる。誰もが住みよいまちにしていくためにも、住人がもっと積極的にまちづくりに参加し、行政も住人の意見を尊重し、柔軟に取り入れていくことが必要である。

最後に、アンケート調査にご協力いただいたダイヤランド地区、女の都地区住人の方々に深く感謝の意を表する次第である。

参考文献

1)福原正弘:ニュータウンは今 40 年目の夢と現実、東京新聞出版局、p.15～16, 1998.